

Webデザインの現場から

井上貢一

●福岡トリエンナーレのWebプロジェクト

福岡アジア美術館では、3年ごとにアジア地域の美術の新傾向を紹介する展覧会「福岡アジア美術トリエンナーレ」を開催している。その4回目となる2009年、「Webに親しんだ若い世代の発想でサイト構築を行いたい」という美術館側の意向により、当研究室の学生6名のチームでWebサイト制作を担当することとなった(*1)。



写1. 第4回福岡アジア美術トリエンナーレ2009のWebサイト

技術的にはXHTML(*2)とCSS(*3)、また部分的にJavaScriptを利用するという標準的なスタイルであったが、地図情報サービスを利用した作家の活動拠点紹介や動画配信サービスを利用した作家のインタビュー映像の配信など、Web上の各種サービスも積極的に活用した。この取組を通して実感したことは、インターネットにおける情報共有サービスの充実度の高さ、技術情報やサンプルソースコードの豊富さ、そしてオープンソースソフトウェアの信頼性の高さであった。

●オープンソース

オープンソースとは、ソフトウェアのソースコード（プログラム）をインターネットで無償で公開し、万人にその改良や再配布を認めたものである。今回の取組みでは、Webオーサリングを担ったKomoZer、Aptana、画像処理や図形描画に用いられたGimp、InkScape、またメンバー間の情報共有に活用されたPukiWikiなどがオープンソースである。さらに言えば、Webページを配信するサーバーソフトウェアApacheもオープンソースであり、今日のWeb環境はソフト

ウェアに関する限り、コストゼロでも実現できる状況にある。オープンソースはユーザ主導の開発で問題の修正も早く、インターフェイスの標準化も進んでいる。現状、国内での認知度は高くはないが、Webに精通した若い世代の動向を見る限り、その普及は必至といえよう。

Webの世界では、「クローズド」よりも「オープン」な仕組みを前提とするケースが多い。典型的な例が「ホームページのソースコード(HTML)」である。ブラウザ（閲覧ソフト）のメニューには「表示」→「ページのソース」という項目があって、当該ページを生成しているソースコードが誰にでも読める。そしてこのことがWebの急速な普及に大きく貢献したのである。

他の霊長類と異なり人間には白目がある。「どこを見ているのか」という心の内をオープンにする戦略が人類繁栄の契機の一つであったと考えると、著作権を保護しつつ複製や再配布の自由を事前許諾するという Creative Commons の発想がグッドデザインに認定されるのも、必然的な結果だといえる。「情報=有料」とする従来型のビジネスとの摩擦は避けられないにせよ、Webが培ってきたこのオープンな思想は、これからのデザインを考える上で、大きな価値転換の契機となるであろう。

●オープンな技術とデザイン

Webにはオープンな技術をベースとして生まれたいくつかの重要な智恵がある。

一つは「ハイパーリンク」や「埋め込み」の発想である。これは既存の情報の有効活用であり、情報構築の手間を大きく軽減する。ワンソース・マルチユース、無駄に情報を増やさない。この発想は、プログラマーがよく使う「アドレス渡し」にも似ている。「人に車を貸す」という話に例えると、「相手宅へ車を運ぶ」という「実体渡し」に対して「電話で車のある場所を教える」というのが「アドレス渡し」である。短時間で事が済み、余分な駐車スペースもいらなく、そして無駄にガソリンを使うこともない。リンクや外部サービスの埋め込みで、

実体の複製や再編が不要になるというのは、時間、空間、エネルギー、あらゆる資源の節約と、ゆとりの創出につながる。

次に、W3Cが策定するWeb標準の骨子、「内容(XHTML)と表現(CSS)の分離」である。ポスターや雑誌では、情報の内容(文章)は表現（レイアウト）とともに紙という媒体上に固定されるのだが、Webでは内容と表現を別々のファイルとしてフレキシブルに関係付けることが推奨される。これは、情報の様態がハードウェアに依存するアナログ媒体にはない発想である。ソフトとハードが完全に分離可能なデジタル媒体では、見出し・本文・キャプションなどといった構造区分(さらにいえばデータベース設計)がしっかりなされていれば、内容は再利用可能な資源として蓄積することができ、また表現は適宜交換可能なものとして扱うことができる。サステイナブルな情報の活用が可能になるのだ。

そして、Wikipediaでよく見る「このページは書きかけです」という表現。つまり、暫定公開を許容する発想である。紙媒体と異なり、Webは日々更新されるのが常である。完全な情報でも、更新されなければランクが下がる。要するに「編集の持続可能性」に価値があるのだ。人間の心と同様、情報は編集完成品ではなく「編集され続ける記憶」として存在している。

情報資源の節約、編集の持続可能性、心をオープンにするという人間に特有の戦略が技術に反映されたことによって、Webは人間の脳にそっくりのふるまいをするようになった。賛否あるにせよ、ユーザ視点で見れば、快適な環境が実現しているのだ。

「技術の人間化」ならぬ「人間の技術化」という発想の可能性が見えてくる。

[註]

1. URL <http://www.ft2009.org/> 制作：西村千秋、三重野貴裕、中馬修、原田裕弥、柏木深里、酒井彩
2. Extensible HyperText Markup Language：従来のHTMLをXMLの文法で定義しなおしたもの
3. Cascading Style Sheets：ページ上の要素をどのように修飾（表示）するかを指示する仕様(書)